



Title	戦後日本社会と公営ギャンブル
Author(s)	古川, 岳志
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43311
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ふる 古 かわ 川 たけ 岳 し 志

博士の専攻分野の名称 博 士（人間科学）

学 位 記 番 号 第 1 6 7 1 5 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 14 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

人間科学研究科社会学専攻

学 位 論 文 名 戦後日本社会と公営ギャンブル

論 文 審 査 委 員 （主査）

教 授 伊 藤 公 雄

（副査）

教 授 木 前 利 秋 助 教 授 吉 川 徹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、戦後の日本社会の変容過程において、公営ギャンブルがどのような社会的意味を帯びて存在してきたのかを考察した。序論としての第1章、それぞれ異なった視点からの考察として第2章から第4章、まとめとしての第5章という構成になっている。

第2章では、社会制度としての公営ギャンブルが誕生した経緯を、各競技毎にたどってみた。そこでは、戦前から続いてきた競馬と、敗戦直後の混乱した社会状況の中で新しく誕生した競輪・競艇・オートレースが、それぞれ違った初期条件の下でスタートしたということが明らかになった。「天皇賞」に象徴されるように、戦前からの社会的価値を、そのまま受け継いできた中央競馬。草競馬という起源をもち、戦後の混乱期に「闇競馬」として、戦後公営ギャンブルのさきがけとなった地方競馬。戦前の競馬の「軍馬増強」という名目を模して、「工業振興」など戦後の社会状況にあわせた衣装をまとい誕生した、競輪・オートレース・競艇。戦後日本の「発展過程」は、よく「廃墟からの復興」と表現される。しかしながら、戦後の日本は「ゼロ」からスタートしたのではなく、戦前からの様々な社会遺産を、「戦後民主主義」のタテマエにうまく適応させつつ活用してきたのであった。公営ギャンブルの誕生過程は、それをよく示していると言えるだろう。また、戦後日本社会の基礎を作った大きな存在として進駐軍による対日占領政策があった。徹底的な民主化・非武装化政策から、冷戦をにらんだ「同盟国化」政策へという米国の政策転換は、遅れてきた公営ギャンブルであった競艇にとって、戦前の遺産をスムーズに利用できるという有利な条件を準備したのであった。

続く第3章では、公営ギャンブル場という場所に焦点をあてて、その配置状況を考察した。公営ギャンブル場が作られる「場所」という点でも、戦前と戦後の社会空間における連続性と断続性をみることができた。戦前の競馬場は、馬産地や、大都市郊外リゾート開発地などに作られていた。戦後の競馬場も、多くは、戦前から続く場所で再開されたのであったが、全般的にみれば、馬産地を背景にした地方の競馬場は少なくなり、都市の人口密集地に集中することになったのであった。戦後派各競技の場合は、特に、戦後の経済復興を支える工業地帯を中心に、数多く作られたのであった。しかし、競輪場などの立地も、戦前のリゾート地・娯楽施設集中地域など、スポーツやレジャーと「ゆかり」をもつ場合も多かったのである。けれども、戦後初期の社会不安を背景にして、公営ギャンブル場は、騒擾事件などがおこり、アウトロー集団がはびこる危険な場所として認識されていくようになるのである。

考察最後の第4章では、高度経済成長に伴う「豊かな社会」の実現と共に、公営ギャンブルに対する社会的イメー

ジが変容していくことを明らかにした。まず、美濃部都知事による都営ギャンブル廃止政策を、公営ギャンブル批判の一つの典型例としてとりあげた。「貧しい庶民から搾取する装置」として、存在そのものが「公害」とされたのであった。言うまでもなく、「公害」というキーワードも、また、美濃部都政の実現そのものも、経済的發展だけを目指して突き進んできた日本社会が、ようやく「反省の時代」を迎えた象徴であった。だが、美濃部らの公営ギャンブル批判は、公営ギャンブルが当時大繁栄期を迎えていたことの証左でもあった。それを支えていたのは、中間層が「レジャー」としてギャンブルを楽しむことができるようになったという、大きな社会変容であったのだ。この時代に、戦前からの「歴史の厚み」も有利な条件となっており、イメージチェンジを実現したのが中央競馬であった。しかし、他の公営ギャンブルは、この時代以降、徐々に社会的存在感を失っていくのであった。

これらの考察から、公営ギャンブルは、法律に基づいた社会制度として見ても、また、大衆文化の一ジャンルとして見ても、戦後の日本という特定の社会状況に大きく条件付けられてきた存在であるということが明らかとなった。敗戦から復興、そして経済大国へという、戦後日本がたどってきた社会変容過程を、別の角度から象徴的に浮かび上がらせる社会的存在として、公営ギャンブルは捉え直すことができるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「競馬」「競輪」「オートレース」「競艇」といった、いわゆる「公営ギャンブル」を、戦後日本社会と重ねあわせて論じたものです。これまで、文化の社会学という視点から、この問題を総合的に論じたものはほとんどなく、「公営ギャンブル」の戦後史の社会学的研究という点で、本論文は、初の総合的研究といえると思います。

申請者は、本論文において、戦前からの継承のなかで誕生したもの（競馬）、さらに、戦後新たに誕生したもの（競輪、オートレース、競艇）について、それぞれの成立と発展のプロセスを詳細に考察するとともに、そこに存在している広義のポリティックス（対立、抵抗、妥協など）をめぐって、さまざまな角度から光を当てており、日本のポピュラーカルチャー研究に、新たな知見を加えたという点でも高く評価できると思います。

戦後の「公営ギャンブル」の成立を論じた第2章に続いて、第3章では、「公営ギャンブル」の開催場所という視点から、ギャンブルを都市空間論と重ねあわせて論じ、さらに第4章では革新自治体時代のギャンブルをめぐる言説を分析するなど、戦後初期から1980年代に至る「公営ギャンブル」の展開が、時代の相と結びつけつつ鮮やかに論じられています。分析の手法も巧みであり、今後の研究においてもきわめて発展性を秘めた優れた論文であると思います。

以上、の観点から、本論文は、博士（人間科学）の授与にふさわしいものと判定いたします。